

主催者

ヴァスマー、ヨハネス

(大阪大学)

シックハウス、トビアス

(明治大学)

クラヴィッター、アルネ

(早稲田大学)

参加申し込み・お問い合わせ (宛先)

シックハウス、トビアス

tobiasschickhaus@meiji.ac.jp

会場

明治大学

〒101-8301

東京都千代田区神田駿河台1-1

リパティタワー7階

1075教室

後援

明治大学 国際連携部

文筆のポテンシャルはその表現形式において多種多様である。文化的に異なる執筆シーン(“Schreibszene“)の方式に応じて、文筆に内在する種々の可能性は展開する。言語と同様、文筆は、一般的表記システムのように、社会における生活を組織化する。文筆は、過去を再考する態度を活性化し、革新し、知識の文化的構造を拡大する。

しかし、文筆/ライティングが、意味、権力、痕跡、執筆プロセスに対してどのような関係を持っているかは、これまで東洋・西洋を含む文脈ではほとんど考慮されてこなかった。この交互の空間においてこそ、ライティングと意味構成との関係が、生産的な意味で揺さぶられる。すなわち、新たな読書の痕跡が現れるのだ。

このワークショップでは、次のような問いに焦点を当てていく：

(i) **ライティングの理論的分野**： はたしてライティングと文筆にはどのような構想があるのか？外国の文字文化をエキゾチズム化し、あるいは流用するために、どのような言説的な文章様式が存在するのか。

(ii) **文筆の歴史的分野**： ライティングに沿った区別可能な段階を持つ時代区分とはどのようなものだろうか？有力なテキストの事例や、文章の遺伝的段階を再構築することは可能か？また、そこから文学テキストの歴史的评价にとって得られるものは何か。

(iii) **文筆の芸術文化的分野**： 文筆によりどのような芸術のプロセスが、明示的に引き起こされたのか。文筆に対する芸術的熟考はどのような文化的変化をもたらしたか？

文筆における 文化的な 実践

ワークショップ

2023年11月4日～

2023年11月5日



連続研究会

「東洋と西洋の 執筆シーン」

第一回

日独共同

研究グループ

「文化接触 (KuKo)」

共催：明治大学商学部

2023年11月4日

開会

ご挨拶 I

中林 真理子
明治大学商学部長
(10:00~10:15)

ご挨拶 II

カーペンシュタイン、アクセル
ドイツ学術交流会 (DAAD)、
ドイツ 科学・イノベーションフォーラム
(DWIH) 東京、所長
(10:15~10:30)

キーノート・スピーチ

ラントヴェーア、アヒム (コンスタンツ大学)
世界を書く：ヨーロッパの視点から一白紙の状態
(10:30~11:30) *

I 文筆と痕跡

(13:30~16:00)

ヴァスマー、ヨハネス (大阪大学)
Schriftmaterialität zwischen
Opazität und Medialität

クラヴィッター、アルネ (早稲田大学)

Kleckse, Sudeleien und Skripturen.

Justinus Kerners Klecksographien und

Axel Maliks skripturale Methode

田野 武夫 (拓殖大学)

Die Verbindung von medizinischer Realität und
Literatur im Akt des Schreibens bei Justinus
Kerner ‚Der Reiseschatten‘ und ‚Die Geschichte
Zweier Somnabülen‘

遠藤 浩介 (法政大学、中央大学)

Von der Kritik zur „différance“ der Schrift.
Zu *Mojika* (文字禍) Atsushi Nakajimas und
Mojika (文字渦) Toh Enjoes

II 文筆と翻訳

(16:00~17:30)

ヴィットカンブ、ローベルト (関西大学)
Japans älteste Reflexion zur
Verschriftlichung

新本 史斉 (明治大学)
Zur (Un-)übersetzbarkeit vom Laut in die
Schrift – Eine übersetzungsvergleichende
Lektüre von Ilma Rakusas
grenzüberschreitenden, exterritorialen
Erinnerungspassagen ‚Mehr Meer‘

シックハウス、トビアス (明治大学)
„Nur die Meinungen, die darüber bestehen“.
Zur (Un-)übersetzbarkeit von Schuld in
Franz Kafkas ‚Process‘

2023年11月5日

III 執筆、実践とデジタル化：文筆の物質性

(10:30~12:30)

ゴット、リサ (ウィーン大学)
Digitale Graphien. Grenzüberschreitende
Schreibverfahren des Computerspiels

シシス、フィリッパ (ハンブルク大学)
Von Schrift und Bild – Poggio Bracciolinis
visuelle Rhetorik in Schrift

広沢 絵里子 (明治大学)
Infizierende Schriftpraktiken im Grenzgebiet.
Zur Novelle ‚Die hungernde Haut‘ (Ueta
Hifu) (1951) von Abe Kōbō

ベッカー、アンドレアス (慶応義塾大学)
Aufschreiben, Beschreiben, Zuschreiben.
Schriftlichkeit in Georg Christoph
Lichtenbergs ‚Sudelbüchern‘

IV 東西間の文筆

(13:30~15:30)

ヴェッツェル、ミヒャエル
(ライン・フリードリヒ・ヴィルヘルム大学ボン)
„Japan (be)schreiben“
Roland Barthes' Versuch der Inszenierung einer
meta-kulturellen Autorschaft im Japanbuch
‚L'empire des signes‘

カトホーファー、ジャスミン
(ブラウンシュバイク芸術大学)
Das Reich der Zeichen–Revisited. Auf den
Spuren Roland Barthes' ‚Japan‘

ゲルケ、マクシム (ストラスブール大学)
‚tresorraum japan.‘
Zum Haiku bei Thomas Kling

V 文筆と権力

(16:00~17:30)

藤原 美沙 (京都女子大学)
Enigmatische Buchstaben im Gemälde eines
toten Kindes. Ent- und Verschleierung der Sünde
in Storms Novelle ‚Aquis submersus‘

パル、ロルフ (デュースブルク大学)
Schreibszenen, nicht Schrift. Zur Thematisierung
des Schreibens in der deutschsprachigen
Kolonialliteratur

シュヴァルツ、トーマス (日本大学)
„[...]vielfach sich kreuzende Linien.“ Die
exotische Kalligraphie in Kafkas tropischer
Strafkolonie

*この発表は英語で行われる